

辻

Michi

'26.6

No. 97

御神意を覚え

これは以前も書いたことがあるが、本来人間というものは神様の御目的たる理想世界を造る役目で生まれたものである以上、その御目的に叶うようにすれば、いつも無病息災愉快に働ける。

これが不滅の真理である。ところがなにしろ祖先以来の薬毒があり、また生まれてからも本当のことを知らないがため薬毒を入れるので、それがため病氣に罹ることもあるが、これも止むを得ないのである。しかし神様はお役に立つ人が病氣のため働けないとすれば、神様の方では損になるから、速やかに治して下さるのは当然で、何ら心配はないのである。ところがそれを知らない人達は、薬と称する毒を用いて、病氣を抑えるのであるからまったく真理に外れており順調に治るわけではないのである。

このことは独り病氣ばかりではない。それ以外あらゆる災いも同様であって、すべては浄化作用である。しかし同じ浄化作用でも原因によつては浄化の形も自ら違うのは勿論である。例えば金銭や物質の罪である盗み、使い込み、人に損をかける、分不相応の贅沢をする等々の罪穢れはやはり金銭や物質で償われる。世間よく金持ちの息子などが道楽者で、親の遺した財産を湯水のように使うことなども、親や祖先の罪障消滅をさせられるのである。それというのは祖霊が自分の血統を絶やさぬよう、ますます一家繁栄を望むため、子孫の中の一人を選んで浄化に当たらせるのであるから、この場合なにほど意見しても糠に釘である。

例えばここに二人の兄弟があり、兄はドラ息子で手がつけられないが、弟は律儀真道であるとする。ちよつと考えると兄の方が悪く、祖先の名を傷つけるように思えるが、大乗的にみるとその反対である。なぜなれば祖先の罪穢れを消す点からいえば、兄の方が上だからである。というように人間の考えで善悪は決められるものではない。

また火事で焼け、泥棒に盗られ、詐欺に遭い、相場や競馬、競輪等で儲けようとして損をしたり、商売の失敗、病気で金を使う等々、すべて物質の罪は物質で浄化されるのであるから、たとえ人間の法律は免れ得ても、神の律法は絶対であるから、どうしようもない。すべて相応の理によつて浄化が行われるのである。

またこういうこともある。それは信仰へ入つてからの苦しみである。しかも熱心になればなるほど一層苦しむものである。そこで信仰の浅い人はつい迷いが起こるが、このときが肝腎である。この理はなにかというと、神様はその人の熱心に対して、早くご利益を下されようとするが、まだ汚れがあるから浄めねばならないので、入れ物の掃除としての浄化である。その場合少しも迷わず辛抱さえすれば、それが済むや思いもかけないほどの結構なお蔭を頂けるものである。

これについて私の経験を書いてみるが、私は二十年間借金に苦しめられ、いくら返したいと焦つても駄目なので、とうとう諦めてしまった。それが昭和十六年になつて漸く全部返すことができたので、ヤレヤレと思ったことである。すると翌十七年になるや思いもかけないほどの金が入り始めたので、いままさらながら御神意の深さに驚いたのである。

また世間よく焼け太りなどというが、これも浄化が済んだから運がよくなつたわけである。かの熱海の火事にしてもそうで、焼ける前と今日とを比べたら、雲泥の相違である。以上によつてみても善いことは無論結構だが、悪いことも浄化のためで、それが済めばよくなるに決つてゐるから、ドツチへ転んでも結構なわけで、無病結構、病氣結構としたら、これこそ真の安心立命である。といつてもこれは信仰者に限るので、無信仰者はむしろ反対であり、苦しみが苦しみを生み焦れば焦るほど悪くなるばかりで、ついには奈落の底へ沈むようになる。この理によつて人間幸福の秘訣はこの道理を弁えることである。



瀟湘夜雨(しょうしょうやう) 横山大観

紙本墨画 1 幅

MOA美術館所蔵

横山大観は東京美術学校の第一期生として岡倉天心、橋本雅邦らの薫陶を受け、菱田春草などとともに新日本画の創造に努力し巧みな画面構成のうちに気宇の大きな表現をみせ近代日本画の一つの典型を作りあげました。本図は、水墨画の好画題である瀟湘八景中の一画題を独立した作品として描いたもので、墨の濃淡により大気の動きをとらえています。その奥行の深い構図には水墨画の新方向をめざした大観の技量が感じられます。昭和23(1948)年、第33回院展の出品作です。

《目次》

み教え	2
代表挨拶	4
全国信徒集会(京都)	10
感謝奉告 山口グループ M Y	12
感謝奉告 鈴鹿グループ K M	13
【聖地・聖蹟シリーズ】みあとしのびて 6	17
大弥勒御尊像御奉斎記念祭(京都)	21
聖地 NOW	23
シリーズ明主様(40)	25
連載『神と繋がる明主様の食事観』(6)	28
ファミリー錬成会のお知らせ	30

《令和8年 信仰課題》

魂磨き^{たまみが} 心清めて世を救ふ

尊き神業^{みわざ}に励しめよ皆^{みな}

【実践の誓い】

- 1 み教え拝読をさせていただきます。
- 2 参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。
- 3 明主様の救いを拡げていきます。

代表挨拶

立石 博

紫陽花の色が日毎に深まってまいります。梅雨前線の動きが気になる毎日です。

長雨^{ながさめ}に紫陽花^{あじさい}のはな色あせぬ

うつりゆく世をしのびてもみし

(昭和6年7月1日 『山と水』より)

昭和六年六月一五日、千葉県鋸山山頂にて「夜昼転換」の天啓をお受けになった半月後にお詠みになった明主様のご心中が察せられるお歌です。

先月、五月一七日には、京都平安郷にて聖地直結の会全国信徒集会が開催され、一六二名の参加が許されました。会の今後の方向性について、さまざまなご意見やご要望をいただきました。本当にありがとうございました。今までにいただいたご意見は、役員会にて整理検討し、機関誌「道」などを通して報告させていただきます。なお、当日の進行や音響に支障がありましたことをお詫び申し上げます。

参加者の内、遠方の方を中心に、二九名の方々が前日から宿泊参加でした。翌日の朝拝は、春秋庵に昇殿参拝が許され、みんなが真新しい白のソックスを履いて参拝に臨みました。大弥勒御尊像・明主様の大きなご尊影を拝し、声高らかに天津祝詞奏上、ご讃歌を奉唱させていただきました。昇殿参拝はほとんどみんな初体験で、一様に感動しました。ご神前左手の部屋には「大和心」の横文字のお額と縦文字の「萬教帰一」のお軸がかけられていて、皆さん息をこらして見入っていました。参拝を終えても、その場を立ち去りがたく、しばし思い思いに至福の時を過ごしました。私自身も、何か参拝の原点に立ち返らせていただいた思いでした。今月号では『実践の誓い』2参拝、浄霊、奉仕をさせていただきます。——の参拝に込められた明主様のみ心を、とも

に学んでまいりたいと思います。

明主様ご在世当時、先達や信者さん方は「明主様のみ光をただかずして、布教発展は有り得ない。そしていただいたご守護と布教現場の状況を報告しなければ、次のご用は担えない」との強烈な思いで聖地に馳せ参じ、明主様とのご面会に臨まれました。祭典形式も時代の移り変わりとともに変化し、整えられて今があります。

明主様に絶対の誠を捧げ、明主様から智慧と力をいただいていた「ご面会の心」こそ、世界救世教の参拝の原点であることを忘れてはならないと思います。

『景仰』に「明主様のご生活」という項目の日課（一九一頁）の「まえがき」に、次のように記されています。

「一宗の教祖として何十万の信者を統率^{とうそつ}しておられる明主様ですから、そのご日常もさぞかし神室深く閉じこもられて、俗事には一切耳を藉^かさず、ひたすらご神業に専念^{せんねん}しておられるご日課だと考えがちですが、そのような齋戒沐浴^{さいかいもくよく}的な生活の一片すら見受けられませんで、すくなくとも外面的には、きわめて平凡^{へいふた}そのもののご日常です。

お仕事をされる部屋といっても、そこに取り立てて信仰的な飾^{かざ}りつけがあるわけでなく、たとえば、床^{とこ}の間^まには山水の幅^{ふく}がかけられ、花が活^いけられ、中央に机、隅にラジオ、書棚^{しょだな}という簡素な書斎部屋でした。

このような、あたりまえなご生活の中で、人類救済という

大聖業が、すこしの淀^{よど}みもなく物凄^{ものすご}いスピードで進められているのです。

ただ、際^{きわ}立ったひとつの特徴^{とくちょう}として、明主様は神人合一のご境地で仕事をされておられましたから、そのお屋敷のどの部屋にも、ご神体その他、信仰的なしつらえというものは全くありませんでした。従って奉仕者は、常に明主様を一心に見つめ、明主様に焦点を合わせて、信仰^{しんこう}練磨^{れんま}をしていたわけですから、朝夕真剣にならざるを得ません。

明主様はよく、『私から目を放すな。ただ一心に私を見つめて、命がけで仕事をやってくれ』とおっしゃっていました。ですから、いつも心を張りつめて、充実した体制で臨まなければならぬのです。

そして、明主様は、奉仕者に（中略）、たとえば、墨をすぐ用を与えられたなら、墨すりに関してでは自分の右へ出る者はないという人間になることを要求されるわけで、明主様はいつも、『偉^{えら}い人間にならなくても、私に言われたことが着実にやっていける人間になってくれ。私の言う通りに動けるようになれば、それは英雄だ』とおっしゃいました。」

明主様のおっしゃる「命がけ」とは、与えられたご用を最善の誠をもって尽くしなさい——ということなのです。今を生きる私たちにも、明主様が求めていらっしゃるように感じます。

また、『私の用に変わりはない』（五三〇頁）では、明主様が

ら与えられた受付のご用に張り合いがないと不満を漏らす奉仕者に『治療するよりは、受付の方がズーツと骨が折れなくて結構ではないか。どっちだって私の用に変わりはない。私なんか必要によつては肥料桶こえだづかつぎでもやる。そのかわり肥料桶こえだづかつぎでも、一番になってみせるよ』とおっしゃったそうです。現代生活に当てはめると、会社内で書類のコピーを頼まれる、買い物頼まれる、家庭の中で、掃除をする、洗濯をする、家族のために料理を作る、家事全般同じですね。その一つ一つに誠を込めて打ち込めば、明主様のみに叶い、その積み重ねの先にステージの上だった次のご用にお使いいただけることになると思います。

明主様は、日常生活の中で、挨拶をととても大切になさいました。私たちの家庭も同じですね。『光の家』づくりの基本であり、第一歩です。「おはようございます」に始まり、「おやすみなさい」で一日を終える。そして、たくさんの「ありがとう」を交わせる家庭は明るいですね。

当時の側近奉仕者は、廊下に座つて一同揃つて「明主様おはようございます。日々のご守護ありがとうございます。きょうもよろしくご用にお使いくださいます」と朝のご挨拶をしていました。

夜の休む前のご挨拶は、「日々のご守護ありがとうございます。きょうはご用にお使いただきましてありがとうございます。皆さまも長い信仰生活の中で、自分なりのスタイルや言葉で日々の挨拶・祈りをされていると思います。」

参考にしていただければと思います。朝、夜のご挨拶が、どちらも「ありがとうございます」と、感謝の言葉から始まり、感謝の言葉で終わることが大切なんですね。

明主様は、日々の膨大なご神業を進められる中で、資格者や側近奉仕者の報告には大変厳しい姿勢で臨まれました。一般社会でもホウレンソウ（報告・連絡・相談）といった表現で言われます。現代社会では、ラインやメールといった情報伝達手段が、多く使われるようになってきました。便利の影に隠れた怖さや危うさを、改めて承知することが大事だと日々感じています。

日々信者さんとのやりとりを通して、厳しい浄化の中での、辛さや切なさや溢れているのを感じます。また、ご守護の報告からは、喜び、感謝を受けとめる一方、こちらの対応がまづかった時のご批判を厳粛に受けとめることがあります。ラインやメールのやりとりを通して、人間関係が壊れる場合もあります。オンラインコミュニケーションでは、対面では使われないような激しい文言や表現により、人を死に追い込む事件も過去あったように思います。文明の利器を上手に賢くご用に活用したいものです。

明主様ご在世当時は、対面が主でしたが、地方の信徒からのご守護願いは電話、緊急の場合は電報も活用されました。明主様は切羽詰まった時、緊急の場合には

「私に頼みなさい。そういう場合は字や絵よりも生きている

私のほうが力がある。つまり、私はその仕事の実行者だから。」

『御光話録』三号 昭和24年1月18日

と仰せです。

いざという時「明主様！」と申し上げられる私たちでありたいものです。

『御守護の電報について』（『景仰』三五一頁）

「お側に奉仕しておりますと、よく信者さんから電報や電話で御守護お願いがまいりましたが、そのような場合、取次いだ人はすぐ明主様に、その人の年令、性別、住所、症状などを口頭で申し上げることになっておりました。すると明主様はその場で、『そうか』とおっしゃって、御守護を祈念して下さるわけですが、ある日、電話で来た御守護お願いを、私が受けたのですが、自分で申し上げず、女の奉仕者をお願いしました。

ところが、その人はすぐ取次いでくれなかったのでしょうか。明主様はいつ電話があったのか、だれが電話を受けたのか、女の人にたずねられ、私をお呼びになられました。

そして、私にそのことをお聞きになったあと、『どうしておまえが受けた電話なのに、人に頼むのか。私のところへお願いに来るのは、よくよくのことだ。これからはどんな場合でも、取次いだ本人が必ず私に言いなさい』ときついご注意

でした。（側近奉仕者）

私たちも日々このような場面に遭遇します。家族や親族、仲間の信者さん、友人や知人、さまざまな浄化の知らせ……。自分が何処にいても、何をしていても、明主様はスピード感を何よりも大事にされましたから、すぐに明主様を思い浮かべ、祈り、お繋ぎさせていただくことを心がけたいですね。改めて我が家のご神前に、担当の先生、場合によっては聖地にご祈願をお願いします。聞かされる、見せられる、思わされる事柄は、即対応できるようにしたいものです。

また、明主様にご報告の際は、浄化者の年齢、性別、住所、状況を報告するとありますから、簡潔にポイントを整理して報告できるといいですね。

祈願書については、以前こんなことがありました。私が三〇代半ばの頃です。ある五〇代の女性の信者さんが「先生、私のことは全部明主様はご存じだから、私は祈願書を書いたりましたこともないんですよ」とニコニコして言われました。私は「すごい自信だな」と思いつつ、何も言えませんでした。後日その方に、『景仰』にある一文を紹介すると、ハツとされ、考えを改められました。

『詫びがすんでない』（『景仰』三九七頁）

「明主様には、こわくてウソが申せません。

ある時、四十才前後の男の人（お弟子）が、明主様に何かをお詫びに来ていました。

話を聞いていらした明主様は、『それは初めてじゃないだろう』と言われます。

「いいえ、初めてです」とその男の人。

すると明主様は、『あんたは、去年の何月何日、どこで、こういうことをしたろう』とハッキリとおっしゃいました。

そして、続けて、『あんたは、資格者だ。そういう小さなことでも、その時に清算しておかないから、今日大事にぶつかったのだ。小さなことの詫びがすんでいないからだ』と明主様は言われます。

「明主様、そういうことが、よくお判りになりますね」と私は驚いて申しました。

すると、明主様は、『わたしは、ひとりの人間を知ろうと思えば、毎日のことでも、みな判るが、一々面倒だから、必要がなければしないんだよ』とおっしゃいました。『あんたのこともすっかり判っているんだよ』

「いえ、私のことは結構でございます」と、私は怖くなって申しました。

こういうことは神様でなければ判りっこない。私は、ますます明主様から離れられなくなりました。（教会長）

このお弟子さんが資格者なので、ちょっとしたウソにも明

主様は、激しく切り込まれたのだと感じます。

そして人間が明主様（神様）に向かいお詫びやお願い事をする時、人としての礼節を尽くして、はじめて明主様があの大きな耳をそばだててお聞き届けになるのですね。明主様は、何もかもご存じだからという不遜な態度は許されないことを論されているのだと思います。

終戦前の昭和一九年に始まった箱根神仙郷建設ですが、当時の日本は大変な食糧難の時代でした。全国から集まる建設奉仕隊の信者さん、携わる職人さんたちの胃袋を満たすのは、やはりお米です。何とか明主様のご構想実現にお役に立ちたいと、全国のcomedoころの教会から、たくさんのお米が届けられました。中でも新潟光陽教会の小川栄太郎先生のエピソードは『這ってでも来なさい』『十一時に四人来る』のお話が『景仰』に収められているので、皆さまよくご存じのことと思います。

『十一時に四人来る』（『景仰』四〇三頁）

「終戦直後のことです。ちょうど手配しておいたお米が手にはいり、お餅に搗いて、四人で熱海の明主様の所へお届けに上がりました。そのころの汽車は急行もなくて、朝早く新潟を出たのですが、熱海に着いたのは夜の十一時過ぎでした。もう夜も遅くてひと晩駅で明かし、翌日お届けしようと思っ

ておりました。ところが餅を持っておりますから、浮浪者が寄って来るので、意を決し、今夜中にお届けしようと、東山荘に伺いました。

すると御奉仕の方が、「ごくろうさん」と言つて玄関へ出て来ました。私どもはリュックからお餅を取出し、お渡しして「あすまた来ますから」と言つて帰ろうとしますと、その人が「いや、明主様がさつき九時ごろ私に、『十一時に新潟から四人で米を担いで来る。宿屋がないから泊めてやれ』と言われたので、そのように用意してあるから」と言うのです。私はびっくりしてしまいました。私ども事前に連絡をとつたわけではないのですのに、どうして明主様はご存じだったのか、いまでも不思議でなりません。そして、当時御面会いただいていた『光明の間』には、四人のふとんがチャンと敷いてありました。（教会長）

景仰の話はここまでですが、後の平成二五年に小川先生百歳を記念して『明日の医術に生きる』という本が出版されました。そこには、どうして明主様はご存じだったのか、ということが詳しく記されています。

翌朝小川先生は、東山荘本館にお住いの明主様ご挨拶をされます。「おはようございます。この度は私のようなつまらない人間が尊い所に寝させていただきまして、誠にありがとうございます。——そして、なぜ私たちが来ることがお分りになったのか」尋ねようとしたら、明主様の方から『お

まえが、私のところへ来ようと思っていると、霊が先に私の所へ来るんだ。だから私は分かるんだ。私に分かると、私の光の玉が分裂をしておまえに光となって行くんだ』と仰いました。本当にびっくりしました。

小川先生は「オレは熱心だから御用ができるんだ。俺は運がいいんだ」と思っていたそうですが、自分の力ではなく、「明主様が背後からご守護くださり、お使いくださっているから、できていたんだ」と、それまでの自分の慢心に気付かされたと述懐されています。

今の自分が、明主様の光の玉から光をいただいて、ご守護をいただくようなご用ができていいのか、本当に反省させられます。

地上天国祭を迎えるにあたり今一度自分の大神様、明主様に向かわせていただく姿勢を見つめ直し、ともに進んでまいりましょう。



全国から参集した信徒が心を合わせて祈りを捧げた

全国信徒集会（京都 平安郷）

み心にかなう歩みを目指して

五月一七日、聖地平安郷にて全国信徒集会を開催。全国から一六二名の信徒が参加した。立石代表先達のもとご参拝、浄霊、み教え拝読を行い、参加者一同、明主様のみに心を合わせて祈りを捧げた。

続いて西村相談役より代表退任にあたり改めて挨拶があり、聖地直結の会設立の経緯やこれまでの歩み、会の名称に込められた「明主様のみ心」を求める信仰について話があった。次に、立石代表より挨拶があり、明主様の聖地造営のご事蹟を通して聖地の意義について振り返るとともに、今後の会のあり方について、信徒からの率直な意見を伺いたい旨の呼びかけがなされた。

その後、各地域の代表信徒より、信仰の継承や若い世代との関わり方、活動拠点のあり方、他団体との連携、今後の組織の方向性などについて、それぞれの地域で事前に話し合われた内容や日頃の思い、質問事項などが発表された。また、信仰実践や学びの充実を願う声なども寄せられた。

最後に、今後もそれぞれの地域や家庭を拠点として、明主様のみ心の実践に努めていくことを期し、終了参拝をもって全国信徒集会を終了した。

※お寄せいただいたご意見は後日報告予定。



立石代表の話を傾聴する信徒



信徒から意見や想いを発表



挨拶する西村相談役



終了参拝—それぞれ想いや決意を奉告



発言に耳を傾ける信徒

感謝奉告

ご用を中心にする大切さ

山口グループ MY

明主様より、自身の心臓のことで、自己浄霊を通してご守護をいただき、また、今回妻にも大きなご守護をいただきましたことをご奉告させていただきます。

グループの祭典の場を提供くださっているNさん、いつもその準備などにご協力くださっているTさん、このお二人が、我が家へ浄霊訪問と集会のご案内をしてくださいました。私は、その日が来るのをとても楽しみにしておりました。

しかし、当日、持病のある妻が、調子が悪く起き上がることもできない状態となりました。「こんな状態ではお二人に申し訳ないから、今日は遠慮させていたどころ」と、妻が言うので、私も一瞬「そうだな」と思いました。しかし、その思いに反して私の口からは「こんな時だからこそ、浄霊集会をさせていただき、ご浄霊をいたさう」と、反対の言葉がついて出てきました。その言葉を妻も受け入れてくれ、お二人をお待ちしておりました。お二人の到着後、私が先達をさせていただきご参拝。それまで、妻は横になっておりましたが、何とか起き上が

りご浄霊をいただきました。すると、青ざめていた顔がみるみる赤みを帯び始め、声も出なかった状態から話せるまでになりました。当初、お二人は妻のようすを見て、ご浄霊させていただいたら「早めに失礼しよう」と思われていたようです。しかし、お蔭さまでご浄霊の間に妻の体調は激変したのです。ご浄霊後、妻の方からお二人に声をかけ、集会をさせていただき、当日の朝とはまるで別人のような姿で過ごすことができました。集会終了後は玄関の外まで出て、笑顔でお二人を見送れるまでになっておりました。

私は今回のことを通して、自分たちの思いや身体の状態で結論を出してしまいがちであることに気付きました。明主様がご用意くださった今回の浄霊集会、また、祭典や集会など、そのみ心を大切にしなければならぬことを学びました。そして、ご神業を中心にする大切さの大切さも分からせていただきました。

私たちのグループでは、この一年大切にさせていただいている具体的な営みの一つにもある、「神様がいらっしゃる」ということを認め、「すべて神様がお見通しだ」ということを身をもって知ることができました。『温かな想念』で浄めていく——このことを気付かせていただき、学ばせていただきました。そして、夫婦で支え合い、仲間にも支えていただきながら、「明主様にお導きいただけたのだ」と思わせていただきました。

感謝奉告

二度の脳梗塞から生還

鈴鹿グループ

K M

二度の脳梗塞のご浄化についてご守護報告をさせていただきます。

昨年一月に夫婦そろって瑞雲郷・神仙郷両聖地を参拝することができました。

奥津城参拝は、明主様のもとに帰らせていただけたことへの感謝と喜びを奉告させていただきました。その後、新たに建設された祖霊さまのみ館「紫微宮」を訪れ、厳かで凜とした祭壇に向かい神谷家・小菅家のご先祖さまが再び聖地紫微宮に祀られ参拝できた喜びをかみしめることができました。

聖地参拝により、ここ数年胸につかえていたものが消え、清々しい気持ちで二〇二六年を迎えることができました。一月に八六歳を迎えます。今年はどんな年になるのだろうと楽しみな新年でした。

危機からの奇蹟的脱出

ご浄化は突然何の前触れもなくやってきました。一月六日の夜一〇時半頃、休もうと思い立ち上がった時、頭がボーッとし安定感を失い、「どうしたんだろう」と座り直しました。気付くと左足と左腕から硬直していくのが分かりました。「これは大変なことが起こり始めた」と感じ、ゆっくりと這うようにしてご神前に向かいながら、家内にご浄霊をお願いしました。三〇分ほどした時（私は一〇分くらいと感じました）、左手足の硬直がスーツと取れていったのがはつきりと感じとれました。

「ああ、明主様ありがとうございます——大変な奇蹟を目の当たりにし「明主様ありがとうございます」と口をついて出てきました。

家内が「救急車を呼ばなくていいの？」と言いましたが、気持ちも落ち着いてきたので、そのままご浄霊をいただきながら床に就きました。

翌朝目覚め、手足を慎重に動かし確認をしましたが、どこにも異常はありませんでした。いつも通り朝拝と浄

霊交換をし、朝食後念のため病院に行つて「診察だけしてもらい二・三日ゆつくり休めば大丈夫」と思い、とりあえず病院へ行きました。昨夜の症状を伝え診察を受けました。直ぐにMRIを撮った結果、右脳に血栓があり脳梗塞を起こしていたことが判明しました。

その日は、脳神経科の医師が不在のため、専門の病院へ連絡を取り、救急車で転送されることとなりました。一月七日、即日入院生活をするようになりました。

入院し落ち着いて自身の身体状況を観察したところ、左の腕の外側から手の甲にかけてと左顔面唇から耳にかけて若干のしびれがありました。病室では二四時間点滴がありトイレのみ自分で行き後は安静にベッド生活となりました。

夜、自己浄霊を終え天津祝詞を心の中で唱え床に就いていましたが、同室で私よりかなり障害が重い方が、昼間だけでなく夜になつても言語・計算やお箸の練習などのリハビリをしているようすが伺えました。

私はこの方に比べたら、「この後このようなりハビリをするかもしれないだろうなあ」と漠然と思ひ浮かべていました。ふと唇に痺れがあることに気付き、「そうだ、一日中声を出して言葉を出すことのない環境だから声を出さなくとも口を大きく開けて天津祝詞を繰り返してお唱えしよう」と思い、早速実行に移し数回の天津祝詞をお唱えしているうちに寝落ちしてしまいました。

翌日起きて顔を洗った時、唇から頬あたりのシビレが減少していることに気付きました。そして、その日の夜も、就寝前に昨夜同様天津祝詞をお唱えして休みました。家内が病院に来て私を見て「入院して治療が始まつてから瞼が腫れていたのが何かスッキリしているね」と言ってくれました。

毎日自己浄霊はさせて戴いていますが、浄霊の形だけでなく明主様のみ教えを聴いたり天津祝詞をお唱えすることで数々のご守護をいただきました。明主様から発せられるすべては光となつてお救いくださっていることを学ばせていただきました。

ベッドの上で聖地を仰ぐ

入院から数日後、個室が空いたのでそちらに変わることででき、この日からは就寝時だけではなく一日に何度か口を大きく開け、声を出し天津祝詞を奏上することができました。

毎日のご守護と感謝の連続で、手足顔面のシビレはなくなり一月二三日退院することができました。

突然あの時の手足の硬直を思えば、半身不随になつていてもおかしくないと、一瞬で奇蹟をいただきお救いくださった大神様、明主様に感謝申し上げます。まことにありがとうございます。

暖かくなったら聖地参拝をさせていただこうと決めていましたが、二月四日聖地では立春祭、今日の良き日だと思います。ご守護御礼のお玉串をお届け（送金）しました。

その日のうちに、本部事務局から「お玉串を受領したこと」と「どのようなご守護をいただかれたのですか」というメールをいただきましたので、「脳梗塞で危ないところをご守護いただいた」との報告をさせていただきました。

二月に入り数日後の夜、右足の裏側指の付け根に激痛が起こり、足を木のバーに押し付け痛みをこらえ、自己浄霊によりその場は何とかしのぐことができました。その後も数日間痛みが続き、その足の右半分が硬直してまるでガムテープでも貼ってあるかのようにツルツルの状態になりました。

家内に毎日ご浄霊をいただき、マッサージをしてもらっていましたが、一向に状況は良くなりません。原因が分からず、糖尿病もあって血糖値も相当高く、不安もあり診察してもらおうと思いました。しかし、あいにくその日は祝日（二月一日）病院は休診日でした。

思案していたその日、事務局から西村先生の意を受け「この度のご守護報告を書いて聖地に届けてください」というメールをいただきました。

西村先生に事情を話し「報告書は直ぐには書けそうもない」旨お伝えしました。先生から「病院へ行って医師

に診てもらってください」と、ご指導をいただきましたので、翌日病院へ行くことにしました。

再び発症した脳梗塞

翌日病院へ行きましたが、診察を待つ間は何事もなかったのですが、呼ばれて診察室へ向かい始めたところ、右足がつり始め、歩きづらくなってきました。

医師にこれまでの状況を話すと「足が痛いなら診てもらうのはここではなく整形です」と言われ、「その通り」と思いましたが、右足が硬直し始めているし、退院したばかりで若干の不安もあるので、MRI検査をお願いします。

結果、「左脳で脳梗塞を発症しています」ということで、即入院となりました。点滴に繋がれて、安静にしていますが、翌日には身体の右半分はシビレ、筋肉は硬直化しました。一月にすばらしい奇蹟をいただき、感謝と喜びにひたっている間もなく、再び脳梗塞に見舞われ、ただただ驚くばかりで「なぜだろう？この現実をどう受けとめるべきか」と、直ぐには対処できませんでした。

右手と右足は丸太ん棒のように固く重たい状態（感じます。見てくれは普通の足）で、すべての関節の靱帯、筋肉が、緊張の極限の状況となり、前回とは全く別次元の痛苦でした。こんな中にあっても今回も言語障害はな

く手足も自由に動くことに感謝の思いでいっぱいでした。

妻も半信半疑の劇的回復

入院三日目、二月一五日家内からメールが届き「家庭祭の参拝」を知らせてきました、私もベッドの上で参拝させていただきました。

その夜テレビを見ている時、右腕がなんとなく楽に動かせていることに気付き、あまりの嬉しさにメールで家内に喜びを伝えました。家内からの返信が「私が落ち込んでいたので安心させようと思って……」というものでした。私は直ぐ電話をして、ご守護の内容を伝えました。話をしているうちに涙が溢れ、ともに喜び泣き、家内が直ぐにご神前で奉告してくれ、ともに心より感謝いたしました。

翌日からは気持ちも新たに朝夕の祈り、自己浄霊、療法師によるリハビリの他、自主トレーニングで院内の歩行訓練やマッサージをし、痺れた身体に絶えず刺激を与え続けることが日課になりました。

MRIにも映らなかった梗塞の痕跡

二月二七日退院することができ、ご神前にて、元気で我が家に帰れたことへの御礼と感謝を申し上げました。

退院から二ヶ月半後の五月一四日、脳検査のためMR

Iを撮ってもらいました。「普通こんなことはないんですが梗塞の痕跡が消えています。全く映らないんですよ」と、驚くべき結果が、医師の口から伝えられました。そして「映らないということは別に悪いことではないんですが、まあ良かったです」と、わけの分からない朗報を伝えられました。

あの丸太ん棒のように硬直し痺れた私の右半身、がんじがらめに絡みきった糸をほぐすかのように細胞の一つ一つをゆつくりと確実に解き放つてくださった様は、神技以外ほかにありません。

今思えば一度目の脑梗塞を、「一瞬でご守護いただきああ良かった。奇蹟がありがたかった」だけで済ませてしまっていたかもしれません。神様は、私を見透かしたのでしょうか。間髪を入れず、再び脑梗塞を宣告されたこと、その時は「なぜ!？」という思いがありました、人間を形成する何十兆個という細胞を、意のままに操る神様の技を目の当たりにし、もやもやは消え去り生かされているありがたさに感謝が溢れてきました。

毎日手足をさすりながら「細胞さんありがとう。明主様ありがとうございます」と幾度となくつぶやいています。

明主様の「神は光なり……」のみ教えをしっかり受けとめ、光を求め大神様、明主様のみ名を奉唱し、お役に立つことができるよう歩んでいきたいと思っています。

大神様、明主様、ありがとうございました。

鋸山

天啓聖蹟

昭和六年六月一日、明主様は神示により数十人の弟子を伴い、千葉県安房郡鋸南町の鋸山に登られ、黎明の東天に向かって天津祝詞を奏上されました。

その時明主様は、霊界が邪悪や不幸の多い夜から、光明輝く幸福に満ちた昼へと転換するとの啓示を受けられました。

また同時に、世の救い主として、病・貧・争のない新しい文明、光明世界を創造していくご自身の大使命を、より深く自覚されました。

この神秘かつ意義深い神事を永久に顕彰するため、昭和四〇年六月十三日、本教立教三〇周年記念事業の一環として、この地に「天啓聖蹟」碑を建立しました。以来、毎年六月一日を中心、多くの信徒が訪れております。

明主様ご一行は六月一四日、提燈の灯を頼りに石段を登られ、深夜に日本寺に到着されました。翌二五日午前三時、明主様は真つ先に起床され、一行とともに山頂へ向かいました。

「^{あしびき}足曳の^{やまじ}山路の^{やみ}闇をかきわけて提燈の灯をたよりに登りぬ

(中略) 石段を登ること約一時間、頂上に着くころ、六月の朝は海上はるかかなたの水平線のあたりから空が白み始めた。幸い、好天氣に恵まれ、朝靄^{もや}の中からしだいに姿を現わしてくる房総の海や、周囲の山々、さらに関東一〇州を一覧できる雄大な光景は、その名の通り、えも言われぬ美しさであった。(中略)



十州一覽台(天啓聖蹟)へ続く階段



天啓聖蹟前に広がる東京灣の眺望

山頂をあとに、下山の途^とについて一行は、道すがら、すっかり明るくなった朝の光の中で、異様^{いよう}な姿の仏像を見た。登る時は暗かったもので、判然としなかったが、それは首のない石仏の群像であった。教祖はこれを見て、山頂での秘事^{ひじ}とも合わせて、今や仏界に重大な変化が起こりつつあるということを、深く覺^さつたのであった。

心なき人の多きも立ち並ぶ羅漢の半数首の無きかな」

『東方之光』上巻より



錫山中腹にある千五百羅漢道



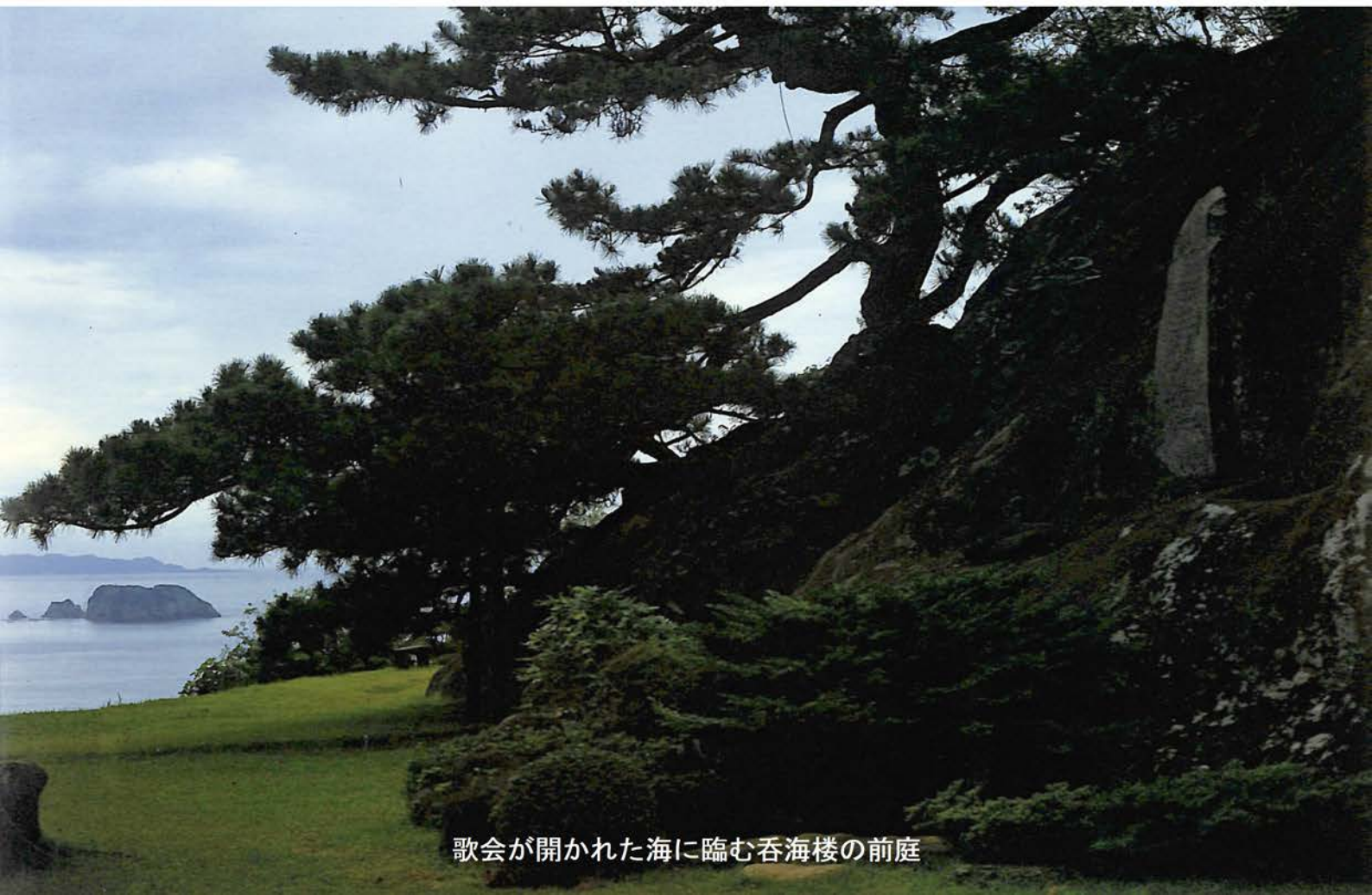
山頂から日本寺に戻られ、本堂前にて記念撮影



令和7年改修が完了した日本寺本堂



呑海楼(日本寺本堂の下に建てられた仏閣)前での明主様と二代様



歌会が開かれた海に臨む呑海楼の前庭

大弥勒御尊像御奉斎記念祭、
厳肅に斎行（六月六日 京都平安郷）



大弥勒様に、地上天国建設のご経緯が進められていることへ感謝を捧げた



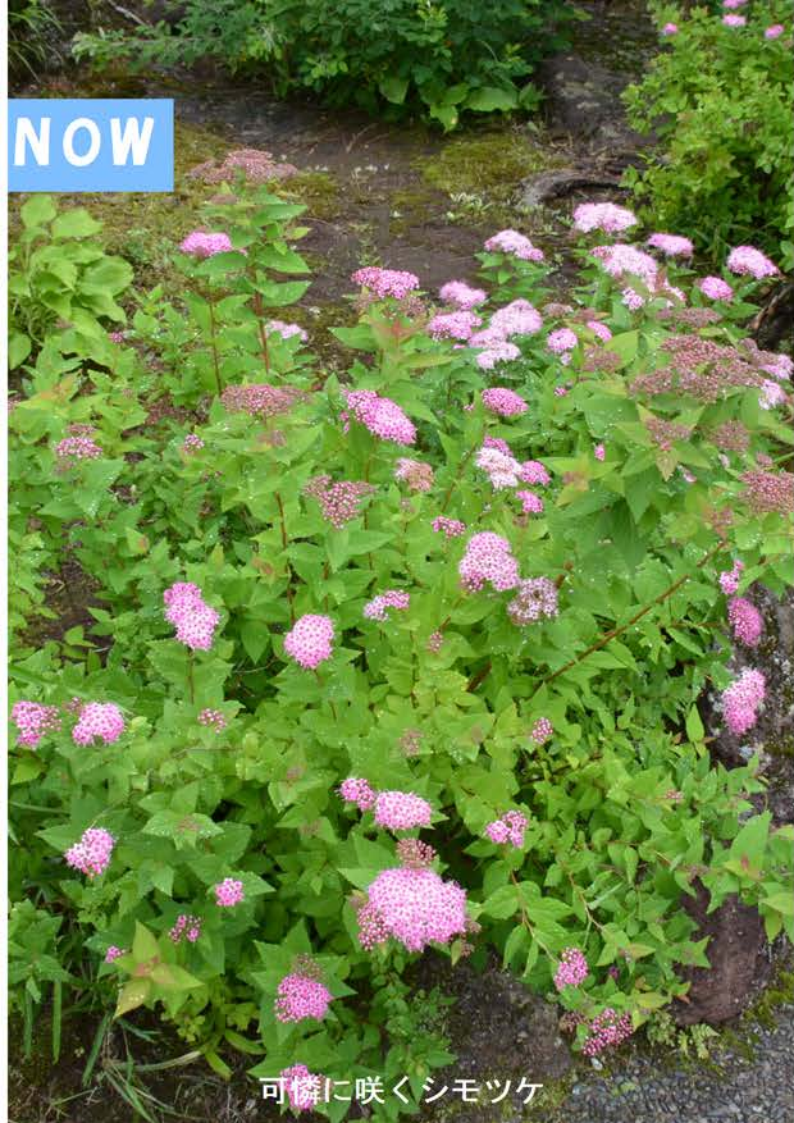
挨拶に立つ杉原理事長



祈りを捧げる参拝者

挨拶に立ったいづのめ教団杉原理事長は、この度、平安郷に明主様ご真筆の大弥勒御尊像が奉斎されたことを発表し、その経緯と意義について述べた。昭和25年、世界救世教開教^{メシヤ}のご事蹟を紹介しながら、世界的なご神業が進展する中、「改めてその使命と責任を自覚し、信仰の向上に努めていきたい」との思いを表明。また、家族との死別や病の浄化を通して、感謝の実践やご奉仕によって心が救われた信徒の体験が紹介された。

NOW



可憐に咲くシモツケ



睡蓮浮かぶ池と龍頭の滝



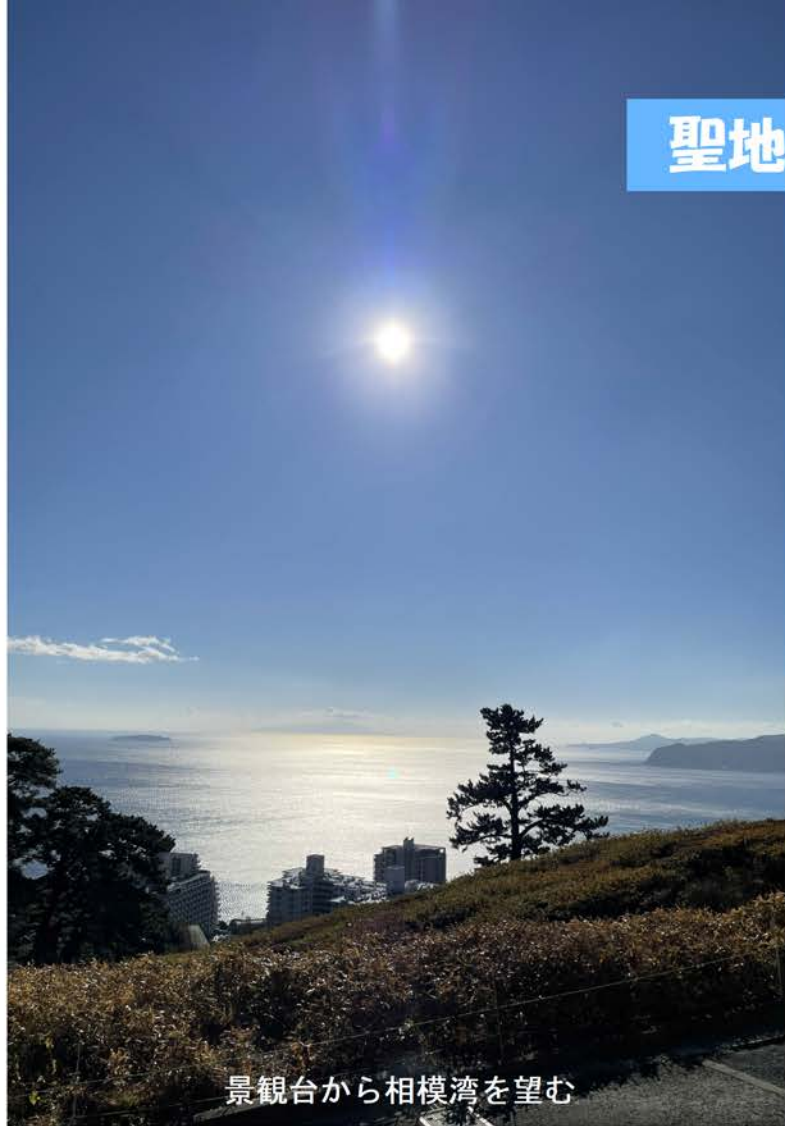
苔むす巨岩と木々が調和する、初夏の苔庭

瑞雲郷



瑞雲会館から一望する新緑の梅園

聖地



景観台から相模湾を望む



清楚に佇むアジサイ



サツキが織りなす花の絨毯



鏡池前のハナショウブ



平安郷

川辺に咲くギボウシ



見頃を迎えたアジサイ



満開のシャクヤク

シリーズ 明主様(40) “救世の道”

立教のそなえ 「善言讃詞」

昭和九年（一九三四年）一二月四日、立教への準備が進められるさなか、岡庭真次郎のもとへ教祖から、

『観音経』を持って応神堂へ来るように。」

という内容の電話がはいった。岡庭はさっそく、『観音経』（法華経二八品中の第二五番目、観世音菩薩普門品のこと）を持参すると、教祖は、

「今から祝詞を作る。」

と言って、その『観音経』を参考に口述を始め、それを井上茂登吉が筆記してできあがったのが、『善言讃詞』である。

これは観音の妙智、力徳を礼讃し、その威徳によって招来されるべき“みろくの世”の様を描写した独特のもので、その奥には、夜から昼へ、仏界から神界への推移——霊界転換の深い神意が込められている祝詞である。

『観音経』は釈迦が最晩年に説いた教え、『妙法蓮華経』（法華経）に含まれる。すでに述べたように、そのすこし前に説かれた無量義経に、「四十余年には未だ真実を顕わさず」とあり、その後の『法華経』の中で初めて釈迦の生涯の総決算ともいべき真実が説かれたといえるのである。この意味において『法華経』は仏教におけるもっとも重要な經典の一つとされる。しかし、それは古代インドで使われた梵語で書かれ、二千数百年前当時のインド民衆を対象に説かれたものである。したがって現代人にはそのままではめることのできない部分がある。そこで教祖は、『観音経』に込められた霊的な意義を受けて、祝詞形式の『善言讃詞』を創案したのである。教祖は、その意図をつぎのように述べている。

「所で日本の祭典は古来神の形式をとってゐた。千三百年前仏教が入って来たが、その前まではすべて神の形式であり、本来は祝詞であつた。仏教のよい点を神式にしたのが善言讃詞なのです。」

『観音経』の中の字句を含みながら、しかも簡明流麗、韻を踏んだ美しい響きは、人の魂を浄め、天国に遊ぶ思いを起こさずにはおかなく、まさに、その名の通り、善言であり、讃詞である。

ところで教祖は、立教前年の一二月、宇津木義郎という人

物について、神道の教義や祭式作法などを修得し、昭和一〇年（一九三五年）にはいつてから神道者の資格を取得している。宇津木は、神道本局上総分局長という立場にあり、権大教正という上級の資格をもつ人であった。このように立教に先立って、公認の宗教資格取得の準備を始めたことは、慎重な教祖が新宗教に対する当局の厳しい時代の中で、神業を推し進めるために、細心の配慮をした、その一つと見ることができるであろう。

「規約作成」

昭和九年（一九三四年）も押し詰まるにつれて、「大日本観音会」発会の機運はしだいに高まってきた。一月二五日、大森の松風荘で秋季大祭が開かれたが、その時教祖は、

「昭和一〇年（一九三五年）一月一日を期し、大日本観音会として開教する。」

むねの宣言をしている。

そして、その月の二八日には、応神堂へ幹部六人を招いて会合を開き、「観音会」の規約などを定めたのであった。『日記』にはつぎの歌が記されている。

観音会の規約大方出来にけり
簡単なれど整ひてをり

「大日本観音会会則」は一一條から成っている。主要な項目をあげると、

- 一、本会は大聖觀世音菩薩の本願たる大光明世界建設の大業に参加活動するを目的とす。
- 二、本会は東京市麹町区麹町一丁目七番地一へ仮本部を置く。
- 三、本会に会長一名、次長二名、顧問数名、理事長一名、理事若干名及び庶務會計を置く。

と定められ、第七條から一一條までは会員についての規定で、「会員は観音御神体を奉斎するものに限られ、入会金は五〇錢、会費は一人一か月一〇錢以上を本部に納入し、毎月の月次祭、春秋の大祭には必ず参拝のこと（ただし地方信者は月次祭参拝は随意たること）」などが定められている。

一二月にはいると、都内四支部が次々と新しく発足し、それぞれ教祖を迎えて発会式を開いた。まず、一二月七日、東京市杉並区阿佐ヶ谷一の七二八、中島一斎方において、阿佐ヶ谷支部が発足している。『日記』には、

中島方観音会支部発会式四、五人連れて夕方ゆけり



創業時代関係施設略図

と詠まれている。残り三支部の発会、支部長はつぎの通りであつた。

二月一五日 ^{みどり} 緑支部 東京市本所区緑町四の三二

二月二〇日 ^{にしはら} 西ヶ原支部 東京市瀧野川区西ヶ原四八九

二月二六日 ^{せたがや} 世田谷支部 松久茂徳方 東京市世田谷区三宿町五四

^{あらやおとまつ} 荒屋乙松方

また、二月二二日には、麴町四丁目に設けられた機関紙編集所において、観音像の奉斎が行なわれた。ここはそれまで新聞配布係の宿舎であつたが、新たに「東光社」と名付けられ、編集出版の業務を担当することとなつた所である。

次号に続く『東方之光』（上巻）より

菜食について

（株）瑞雲 代表取締役 堀口照正

最近、菜食について、また肉を食べることの是非について問われることがよくあります。今回は明主様のみ教えを基に、ご一緒に学んでまいりましょう。

私は明主様のみ教えから、次の三つのポイントを大切にしております。

- 1 日本人の体には菜食が理想であること
- 2 病気の時は菜食に徹するのが良いということ
- 3 現代生活においては、魚・鳥・肉などは楽しみとしてバランスよく食すのが良いということ

明主様のみ教えにおいて、菜食の大切さに触れられたものは数多くあります。その原点は、明主様ご自身が青年期に「肺結核」と診断され、医師から見放されながらも、菜食に徹することで完治されたという実体験にあります。

「私は十七、八歳の頃、肺結核を患い故入沢達吉医博から見放されたことがあった。その際死の覚悟をもって私はあるこ

とによってヒントを得たる絶対菜食を行ったのである。ところが意外、病勢一変しメキメキと体力が復活し菜食三ヶ月にして病氣以前より健康になったのである。そのことあって以来、私は栄養学の全然誤謬であることを知ったのである。その後、私の血族の肺患二人まで、菜食療法で完全に治癒したことがあった。勿論その頃は無信仰者であったから、ただ菜食だけで治ったことは勿論である」

『これを何と見る』天国の礎」浄霊下²³⁴頁 「光17号 昭和24年7月9日」

このように明主様は、宗教生活に入られる以前から、当時の西洋医学や栄養学の誤りに気付かれました。菜食を始めて一週間後には薬を放棄され、菜食を三ヶ月続けられたことで、「病氣以前よりも健康になった」と仰っています。

その後、お子さま六人を含むご家族十数人に対して野菜を中心とした粗食を実践され、病氣のない幸福を得たとも仰っています。さらに昭和一六年八月、栃木県の湯西川に「完全菜食」による「無医村」があることを知って現地を訪ねられ、「無医薬と菜食がいかに健康に好いかという事実で、まったく私の説を裏書きしており非常に面白いと思った」と、菜食の大切さを私たちに伝えてくださっています。

明主様は、私たちの身体と同じように食べ物にも「霊」と「体」があり、その両方の栄養が必要であること、そして

靈の栄養を「靈氣^{れいき}」と称されました。その靈氣が多量に含まれるものとして、「新鮮な野菜」や「とれたての魚」を挙げられています。この靈氣については別の機会に詳しく学びたいと思いますが、靈の栄養という観点からも、菜食の大切さを私たちにみ教えくださっているのです。

一方で明主様の食事観は、菜食の一边倒ではなく、鳥や魚、そして肉食についてもバランスを大切にしようみ教えくださっています。

「次に、食物には動物性食餌と植物性食餌とありますが、大体に両者半々に食うのが原則であります。

魚 鳥 五分

野 菜 五分

然し、男子は、活動する場合は、魚鳥七分、野菜三分位迄はよろしい。やむを得ず獣肉を食わなければならない人は、一週間に一回位なら差支えないのであります。

又、良質の血や肉になる栄養は野菜であり、欲望とか智慧の出る栄養は魚鳥にあります。

年を経^とって欲望の必要のない人は植物性を多く摂^とるのが良いのであります。(中略) 野菜七分、魚鳥三分位が最もいいので(中略)あります。

又、肉食が多いとどうしても性質が荒くなり、鬭争や不満破壊性が多分になります。彼のライオン、虎の如きがそれで

あり、牛馬の如き草食動物は柔順であるにみても瞭^{あきら}かであります」
(「岡田先生療病術講義録」上巻(四) 昭和11年7月筆録)

明主様ご自身も、朝・昼・夜と、動物性、植物性などバランスを考えながら栄養過多にならないよう食事をされていました。

近年は、マクロビオティックやベジタリアン、ヴィーガンなど、菜食を推奨するライフスタイルが世界的に話題となっています。こうした主義を徹底することで食生活が改善されるのはすばらしいことですし、菜食中心の食文化が広まることで病気が減っていくことは、とても喜ばしいことだと感じます。しかし、明主様の示される食事観は、体質や年齢、仕事内容や生活スタイルによってそれぞれ異なるものであり、「是か非か」という極端なものではありません。常にバランスを大切にする「中庸」のあり方です。

そして、これまで学んできたように、「食べ物とは、神様が人間を造ると同時に用意された、生きるために必要なものである。私たちが美味しいと感じ、その時に欲するものこそが、健康に生きるための食べ物である」という視点に基づき、神様から許された「人間と食」、そして私たちの「楽しみと喜び」を何より大切にする、神様を中心とした食事観なのだと思います。

これからもう一緒に学びを深めながら、皆さん一人ひとりの体に合った、最適な食生活を掴んでまいりましょう。

「ファミリー鍊成会2026」のお知らせ

昨年ご好評をいただいたファミリー鍊成会を、今年も開催いたします。

テーマ

いのち

“土”の聖地平安郷で、温かな光と愛に触れ、心の奥にある「魂」の存在に気づき、学び、語り、支え合い、明主様が喜ばれる私たちへと成長しよう。

※参加対象は、体力に自信のある方(8月の京都は非常に暑いため)で、70歳(心は青年)ぐらいまでの方とさせていただきます。



また、下記についても募集しております。

- 鍊成会運営のお手伝いをしていただける方
- 「いのち」と関わるお仕事や経験についてお話しいただける方（医療・福祉・教育・農業・子育てなど。当日参加が難しい場合はビデオレターでも可）

多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

日時：8月8日(土)13時～9日(日)13時

場所：平安郷研修センター

京都市右京区嵯峨広沢池下町24

参加費：1人 3,000円

申込締切：7月18日(金)

注意事項：各自熱中症対策をお願いします。

※持参品などは後日連絡します。

◆申込先

各地域の担当専従者から職員グループLINE、または下記メールアドレスへお申込みください。
seichicyokketsunokai30@outlook.jp

※3日以内に受付確認の返信をいたします。返信がない場合は、お手数ですが再度ご連絡ください。

◆申込内容

参加者全員の氏名、年齢、性別、所属名(所属のない方は都道府県)、運営奉仕・「いのち」に関するお話希望の有無



紫陽花

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1 階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 97 2026年6月15日発行

世界救世教

明主様と聖地に直結する会

